
アウト！

紫乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アウト！

【Zコード】

N1447Z

【作者名】

紫乃

【あらすじ】

病院玄関ですべつて転んだ先は異世界でした。28歳彼氏なし。ライトイノベルは好きだけど、まさか自分がトリップするなんて…、あの、明日も勤務なんんですけど帰れますか？

転んだ先

「ひやあれや！」

べたん

多分そんな音がしたと思つ。

なんとも情けない声を出してしまつたことに恥ずかしくなり、急いで立ち上がつた。

「……あれ？」

あたりは真っ暗だつた。

「……なに？」

何度も瞬きして、目をこする。恐る恐る田を開けてみれば、外だといつことは分かつた。

暑いぐらいの風、瞬く星、虫の声、周りは背の高い草、足元は多分土。

「……どじよ」

とつあえず携帯ライトを点けて辺りを見回してみると草のせいでよく見えない。

先ほどまで病院にいたはず、夜勤明けで帰るところだったから朝だったはず、季節は冬だったはず。

転ぶ前の状況を思い出して頭を抱える。

「……トリップつてやつ？」

ライトノベル大好きで、トリップものもよく読んでた。

認めたくないが自分は違うところに来てしまつたらしい。

せめて日本のどこかがいいなあ、お金使えるかな。家までどうやって帰る…

こういう展開になつた主人公たちはどうやって帰つたんだっけ…大きくため息をついて、座れそつなどいろを探して草をかき分けた。

「あー…疲れた」

夜勤明けに太陽の光は厳しい。
しょぼしょぼする田をこすつて、首を回せば「キッ」と音がした。

今日は帰つたら寝る。

ずっと寝る。

だつて疲れたんだもん。

あ、でも買い物行かなきや…

重い足取りで職員玄関に向かう。

玄関を出れば雪が降つてゐるんだるひと想ひと、より憂鬱になる。

「…つつ、わあ！」

廊下の水滴に靴が滑つてバランスを崩す。

あわてて傍の壁に手をついた。

はず…だつたんだけど。

なんか、すり抜けた…

眠気なんて一氣にさめて、必死に草をかき分ける。

どれくらい進んだか分からぬけど、少し小高い丘を登つたようだ。
丘の上にあつた大木に寄りかかつて座り込めば、もづ足に力が入ら
なかつた。

「…ほんと、どこよ、ここ」

つぶやく声も弱弱しく感じてしまつ。

「…月が、ない」

見上げる空には月がなかつた。

いや、日本でも月の見えない夜もあるしね！

携帯のライトを消してコートを脱いで足にかける。
帰れるのかな、明日も勤務なんだけどな…

「疲れたあ…」

少しだけ休むつもりで目を閉じた。

不思議と怖いとか、身の危険とか考えていなかつた。

普段なら外で寝るなんて考えられないのに。

薄れていく意識の中で、ネコの田のよつた金色の光を見た気がした。

「飯は大切です

どこのまでも続く草原

うん、日本にあるね、北海道とか。
行ったことないけど。

友達が旅行に行つた時のお土産おいしかった。

大きな湖

ほら、琵琶湖とかあるじゃない！
なんか色が黄色っぽいけど。

硫黄とか！

噴火する山

えーと。

今噴火してる山… 外国にあつたな。

アニメとかで見るようなおつきな噴火だなあ。

空飛ぶ竜

えーと。

模型。

実は新型の戦闘機。

さすがに現実逃避が難しくなってきた…

明るくなつて、私が見たのは現代日本の光景ではありませんでした…

思わず現実逃避に走った自分、悪くない。

気絶といつ名の一度寝に突入しそうになつたんですけど、私の田の前、伸ばした足の上に鎮座する物体Xが…

「ややん!!」

私のデコに激突して田を覚まさせてくださいました…

その物体X。

なんて表現すればいいのか。

大きさはバスケットのボール。

形は真ん丸。

色は真っ黒。

持てばあたたかくて、軽い。

…不明です。

「さて、どうしようかな」

物体のことはとりあえず放置することに決めて、これからのことを考えます。

現実を見ましょ…

「電波…」

携帯は圈外、当然ですね。

「食糧…」

鞄をあさつても、ペットボトルのお茶しか出できません。

しうがないよね、仕事だつたんだもん。

夜勤に持つて行つたおやつの残り、鞄に入ってくれれば良かつた。じゃあ、帰る方法を考えながら、食糧さがしかな。ぼーっとしてゐる間に時間は過ぎちやうもの。

とつあえず動くか！

「よひーじこしょー…」

「じひこ

物体が足から転がり落ちた。

こうじるこう

丘の下のほうに勢いをつけて転がっていきます。

あ、なんかちょっと罪悪感。

どうしよう、拾ってきたほうがいいかな。

どんどん転がって見えなくなりそうだし、ちょっと慌てて走り出す。

「まつてまつて！」

ぼすん

そんな音を立てて、物体は止まつて止まつた。

「あつぶな、見失うとこだつ… ザやん！」

抱き上げようとした私にまたぶつかってきましたよ、じにわ。

あれ、でもなんか。

「怒ってる？」

うん、雰囲気がね、拗ねた子供みたいな感じ。

ローンローンつて跳ねてるんだけど、くるくる私の周りをまわってるの。

「じめんね」

なんだかかわいく思えてきて、笑つてしまつた。

人の言葉がわかるのか、ピタリと止まつたそれは私をじつとみていた。顔は無いけど、そう思つた。

「ネコみたいねえ」

実家で飼つてたネコを思い出した。

機嫌を直したクロさん（仮名）は私をどこかに連れて行きたいらしい。どういう仕組みか、彼は私を引っ張つて行きます。

「クロさんどこ行くの」

どんどん森の中に入つていくから不安になつてくる。とつさに荷物

つかんできて良かつた。

「こんなにゆっくり歩くの久しぶりだな」

そういう「いえば」の頃は仕事ばかりで、ゆっくり散歩もできてなかつた。

「仕事始まつた時間・・・」

携帯は始業時間を示している。

「あー、遅刻。首だよきつと」

今日は担当の患者さんの検査があつたな。不安がつてたから一緒に行つてあげたかつたな。

昨日手術だつた患者さんの経過は大丈夫かなあ。

「早く帰らないと」

クロさんが返事してくれるわけじやないから、ずっと独り言。
だんだん寂しくなつてきた。

「?、クロさん?」

彼の引つ張る力が弱まつた。

ぼーっとして気づかなかつたけど、目の前に大きな木があつた。リンゴっぽい木の実が生つてる大きな木。

「クロさん、これ食べれるの」

ポンポン。

食べれるらしー。

なんてお利口さん。

慣れてくると可愛いな。

意外においしかつたです。

リンゴの味じやなかつたけど、カスタードクリームみたいなバーラの匂いがしました。

あ、クロさんも食べました。吸い込まれてなくなりました。
ほんどうなつてるのかな、これ・・・。

クロさんは私が「リンク」もどきを鞄に詰めたのをみとどけると、また私を引っ張りだしました。

今度はどこに連れてつてくれるのか、よく分かりません。

でも、不思議なことに怖いとか、警戒心とか全く感じないのですよ。ふつうあるでしょ。

でも、この変な物体に関して私は全く警戒してないんです、無条件に信頼してるみたいな。

「わかんないなあ」

クロさんが私を見上げた気がしました。

こんな訳が分からぬ世界で、変なものを信用して良いのかな。ま、いいか。

だつて他に頼るものないし。

クロさんなんでも知つてそうだし。

…それにしても、やつきからクロさん以外の生物?に全く出会わないのよね。

やつき丘から見た感じでは人外のものとか、怖いものとかいつぱいいやうなイメージがあつたのに。

森はどんどん深くなつていくし。

まさかこの向こうに私を食つてやるうとか考えてる魔物が居たりして。クロさんはそいつの手下だったり?

…ないな、そんなに高等な考えなさそう。

つてか、私がこっちに来た理由つてなんなのかな。

ほら、普通の小説とかでは、伝説の勇者様とか、世界を救つたりする巫女さんとか、あるじやない。

でもねえ、全くそんなんじやない感じ。

多分ぽつかり空いちやつた穴かなんかに偶然にも落つしあがやつたんだろうね。

たまたま。

ああ、ついてない。

ねえ、クロさん、そろそろ疲れました。
アラサーの体力のなさ、見くびってはいけませんよー。

境界

「・・・クロセーん、どこ行ったのー」
迷子です。

クロさんが。
いえ、ごめんなさい、私です。

いや、迷子じゃないかも。

クロさんに安全に夜を過ごせそうなどこつて言つて連れてこられた
ところ、たぶん最初の丘、だと思います。

んで、辺りも暗くなる頃かな、あ、火を起さないと危ないよね。

クロさん、燃やせそうな物ある?

つて聽こいつと思つたら、クロさんはもういませんでした・・・。

頼りすぎてきらわれたか。

単に自分の家に帰ったのか。

後者希望です。

言葉は無くとも、この世界での友人第一号に嫌われるるのは切ないです。

家族の元に返つたんだつて信じて、自力で夜を越す準備をします。
さて木の枝でも拾つてくるかね。

じゃん。テレッテレー

ライター

昨日禁煙宣言した友達から託された100円ライター
禁煙宣言ありがとう! 昨日と同じコードでよかつた。

早速火をつけまして、リンゴもじきを炙つて食べようかな。
わー、サバイバルだー。

みんなライター持つてトリップなんてしないよね。運がいいのか、
悪いのか...

「え？」

私は今、大木の根元。

私の背には木の幹があります。

その幹がかすかに振動したように思つた。背にあたる微かな揺れ。
背を軽く押されたような衝撃。

「ええ？ つぎやあ！」

木を中心に、私を通過して黒い霧のよつなものが放出される。

「はわわわわ…」

私の表面をなぞつていいく霧状のものがあわてて振り払うけど、どんどん増え始めて。

気付けば辺りは霧が立ち込めていた。

空を覆つて霧はゆっくりと世界を夜に変えていく。

青空と夜空の境目が、地平線と交わったとき、辺りに光がなくなつていた。

空には星が瞬き、ビロードの闇が広がる。

「うわあ…」

その光景をしばらくはじつと見つめていた。

青空に広がつていく闇がキレイで、地平線と交わった瞬間の空気の変貌。

世界の昼と夜の境目は幻想的な風景だった。

「この木から、出たよね…」

振り返れば、かすかに発光しているように見える大木がある。

この暗い中でこの木だけはつきりと見える。

そういえば昨日も、この木が見えたから近くまでこれたんだ。

クロさんが安全つていつたこの木は一体何なのかな。

「・・・明日する事はー、寝るところとかしよう。帰り方わかんな
いもの、せめて快適を求める」「
ゴートをかけて横になる。」

やつぱり今日も月は見えなかつた。

昨日もお世話になつた大木がうつすらと光つてゐるよつに見える。青白い光がぽわぽわ生まれて消えていく。幻想的な光景に見入つてしまつた。昨日もこうだつたつけ？忘れちゃつたけど、綺麗だし、明るくて、いいや。

明日クロさん来るかな。

来てくれるといいな。

自分でつけた火がいつの間にか消えていても、気づかなかつたくらい、青い光に入つっていた。

セルの木の根元で木を見上げてゐるヒト。

ヒトと呼ばれる形のもの。

遠目にしか見たことがなかつた小さく、弱く、賢い種族。

夜である私が見るヒトは、家の中で明かりを点けて笑つたり怒つたり。

独りで過ごすものはいない。

だからだろうか、この世界に迷い込んできたヒトを気にかけてしまうのは。

話す者のいない、寂しさを知つてゐるから。

声

ぼすつ

「ぐはっ！！」

腹に重い衝撃。

目覚めと同時に『えられた苦しみに、思い切り咳き込んだ。体をひねって苦しむ私の横で軽やかにポンポンと跳ねまわっている物体に殺意を抱く。

昨日の来てくれるかななんて言つて女心は咳と一緒に体外に泄え去つた。

「なにすんじや、『うるあ』

巻き舌できないけど、怒りを表現したかった。

ご機嫌に跳ねまわるクロさんを軽くはたいて転がしてやつた。

気づけば辺りはすっかり昼間だった。

昨日の夜の始まりは本当に幻想的で、きっと夜の終わりも負けないくらい綺麗なんだうつて、楽しみにしてたのに、うっかり寝過ごしてしまったようだ。

「異世界生活2日目でーす」

独り言にもだいぶ慣れました。

この状態で元の世界に帰つたら、あまりの独り言の多さに引かれるんじやないだろうか。

カルテ書きながら独り言？あ、いつものことだつた。

いや、ついね、確認しながら…

周りにはスルーされます。

だつていつものことだから。

「時間のながれも同じなのかな。携帯も電源切れちゃつたし、時間も定かじゃないし」

もう一

ちよつといライライするのも仕方ないと思します。

だつて、全然解決の方向が見えないんだもの。
ちょっとそここのクロさん。

そんなに怖がらないでこっちにおいで

カムカム

私にはたかれてから様子をうかがっていたらしいクロさんは素直に
よってきました。

なんて純粋。

「はい。つつかまえた」

がつしりと両手で捕まえて、ぎゅーっととしてみる。
やつぱりクロさんは温かくて、なんだか安心した。

「ねー。クロさん。…ココには私一人しか居ないんだよね」
クロさんが少し身じろいだ。

逃げる様子はなくて、腕の力を弱める。

ぽとん

腕から落つこちたクロさんが私を見上げる。
目の前がにじんでいた。

鼻の奥が痛かつた。

：鼻水出てきた…

28にもなると人前ではなかなか泣けないもんなんです。

仕事で失敗したときも、振られた時も、悔しい時も、ぐつと我慢してた。

でも、ここには誰もいないし。

気を張つてる必要はない。

いつも強いとか、しつかりしてるとか、それが周りの私への評価。
本体は全然そんなことないのに。

ただ、人前で泣けない意地つ張り。

一人で寂しいって思つたはずなのに、一人に安心して泣けてしまつた。

とめどなくあふれてくる涙を止められなかつた。

「……お話をしたいよ、クロさん」

なつさけない途切れそうな声に、かすかに笑つた。

うん、ぼくもおはなししたい。
だからもうとはなして。

自分のしゃべりあがめる顔に混じって声が聞こえた気がした。

やつと落ち着いたと思つたら、クロちゃんはただひたすらへるへる「口口口」がついていた。

焦つて慰めてくれているようにも感じて、嬉しくなった。
訳の分からぬ世界で唯一傍にいてくれる。

クロさんの存在がすごく大きくて、温かかった。

「……でも、家でも作るか？」

涙を流したからか、胸にたまっていた重りが少し軽くなつたようだ
感じた。

ポンポンと、後ろをついてくるクロさんを確認して必要そうな材料を考え始めた。

颯爽と歩く後姿。
不意に見せた雪。

ぼくのじえはまだどうかない

火山といえば…

はつきり言つて、だいぶ快適生活に近づきました。

丘の大木の近くに背の高い草を集めたベッドを作りました。それだけじゃいつか降るかもしれない雨が心配だったから、森の奥深くで発見した巨大な葉っぱを摘んできて壁と屋根の代わりにしました。

後は木の枝とか薦とかで補強して完成

とりあえず休憩スペースの確保ができたので、ここを拠点にいろいろ探しに行こうと思つてます。

自分凄い。自分を讃めるの。だつて誰もいないから・・・。
あー、またヘコミ状態になるとこだつた。

さて探検しよー、クロさん。

昨日の夜もクロさんはお帰りになつて、昼になつて帰つてきました。家族が居るなら一緒に連れて行つてくれても良いじゃない。言つてもダメだつたけどね。

それにもしても、ホントに何にも居ないの。
ちょっと拍子抜け。

「クロさん、他の動物つてこの辺居るの?」

問い合わせてもお返事は相変わらずありません。

クロさんも癒しだけど、他にも居たつて良いと思うの。

怖いのは遠慮します。ホラーとかダメなんで。

「お、湖だー。これつてあの丘から見えた湖かな。やっぱ黄色っぽい

手を入れれば温泉並にあつたかかつた。

あ、火山もあるしね、湖じゃなくて温泉なんだ。

そうとわかつたら無性に入りたくなつてきて、匂いが気になつてきました。

「こちらにきてから当然お風呂にはいっていないんだもの、温泉なんて見つけたら入りたくなるのはしょうがないよね。

ぽんぽん服を脱いでいく私をクロさんは止めもせず見ていくらしい。
誰もいないと思うから、行動がだんだん大胆になつていいく。
素足の先を水面に浸けるだけでどきどきした。

「ケロさん？」

いきなり慌てたように忙しく動き始めたクロさんを不思議に思いつつも足を入れれば、あつという間に胸までお湯に津かつた。相変わらずクロさんは何でかわたわたしてる。

頭も洗つてしまおうと、勢いよく潜れば、するどい歯が正面にあつた。

宙を飛ぶ私を追つて鋭い歯を持った何かがジャンプした。脚の先数センチ先にある脅威に体が固まる。

私を庇うように立ちはだかつた大きな黒い壁にジャンプしてきた生物が跳ね返った。

「なななな、なに!? クロさん！ クロさーん！！」

目前の壁に張り付く。

「アロエが、あなたたちが、和の肌にささめ

ザパザパと浅瀬で身動きが取れない巨大生物。

「ひいいいい！」
私くらいなら楽勝で丸呑みできそうな大きな口

服と、クロさんを引っ掴んで逃走。

マッパ？

そんなの命のほうが大切よ！！

誰もいないんだからいいじゃない！

「はあ、はあ」

荒い息を落ち着かせて、抱えていたクロさんを落つことす。
ぽよんと可愛く跳ねたけど、気にしない。そんなことより怖かった。

「ひどいよ、クロさん。危ないなら言つてよー」

クロさんはじつとこっちを見ていた。

「…」「めん、助けてくれて、ありがとう」

今度から絶対クロさんに確認してから行動する、絶対！

私の反省が伝わったのか、クロさんは満足げにくるりと回った。

「ああ、でも温泉…お風呂…何とかして入りたーい」

温泉の中の巨大生物に気を付けながら入る方法を考え始めた私をクロさんは呆れたように見ていた。

誰か…

温泉を泣く泣く諦めた私は、とりあえずお家に帰つてきました。
クロさんはいつの間にか居なくなつていて、丘に着いたとほぼ同時に夜が訪れた。

夜は真っ暗で月もなくて普通なら怖いと思つただけど、昼間より安心するのはなんだかな。

やんわりと包まれて守られてるみたいに感じる。

夜はクロさんもいなぐてちよつとやみしこくで、独り言が多くなります。

そして昼間あつたことを鬱々と考えてしまこます。

あれは怖かった。

油断してたのもあるよね。

だつてこれまで何にも会わなかつたんだもの。

「あれ? そつにえればあの時クロさんおつきくなつた?」
思い返して氣づく。

大きさ自在?

いいえ、でも壁つぽかつた。

形も自在?

……良じね!!

あつといろんな物に変身できるはずだ!!
明日聞いてみよう。

そんで、色々見せてもらえた嬉しいな。

ネコっぽいイメージがあるから、小動物系とかもいいなあ。

「…………もしかして、クロさんって人間に変身できたりする?
いやいや、高望みはいかんよ!
もしかしたら変身なんてできないかもしれないし。
でも…

「お話をしたいな」

言語的コマニケーションです。

言葉には言葉で返してもらえたなら嬉しい。

たとえ言葉が違っていても、頑張って覚えるから。

人の目を見て話すこと。

相手から言葉をもらうこと。

いつもなら嫌でも行つていて、時には面倒に思えていた他者との会話が懐かしい。

3日目にして限界も近いよ。

泣いたことで少し楽になつたけど、やっぱり誰かの顔が見たいって思うよ。

なんならこの前セクハラしてきたおじいちゃんでも。

この前言いがかりつけてきたクレーマーのおばちゃんでも。

好きになれない職場の同僚、上司、生意気な後輩でも。

この前別れた元彼でも。

「…………だれでもいい」

誰かの傍に居たいな。

世界の果て

「「うおおおおお？！クロさん！すてきー。」

やつてくれました。

変身。

この世界にもいるのか、私の考えがわかるのか、ネコちゃんになつてくれました。

真っ黒のつやつやの毛並みに、青い瞳の美人さん

「かわいいかわいいかわいい」

撫で倒したくなる可愛らしさ。

「こやーっていって！言えるかな？こやー」

クロさんは私の言葉がわかつてゐる。

だから希望を持った。

もしかしたら何かお話してくれないかなって。

でも、私を見つめるだけでクロさんは鳴いてもしゃべつてもくれなかつた。

がつかりって言つたら、ひびこよね。

だつて勝手に期待したんだもん。

明らかにテンションの落ちた私の周りをクロさんが歩き回る。
なんか心配そづい。

《こやー》

「ほ？」

《こやー》

「ええ？」

『「いやー。あつひぬへ、いやー?』』

「……あつひぬ」

『後は、なに喋る?』

声、ではなく。

体の芯に響くよつた、振動。

それは、心配そうに私を見上げるクロさんから聞こえてきた。

『やつと、通じたんだね。ぼく、ずっと話しかけてたんだよ』

「ん、そつなの?」

突然の「」と、パニックですよ。

落ち着いているように見える?

うん、よく言われるけど、内心す、ぐ、トーンパッてるのよ。
ほら、す、ぐ、べ、キドキして胸が苦しい。

『ね、あなたはヒト、だよね』

ヒト、クロさんは私をヒトつて言つた。

それつて…

「うさ、ヒトだよ。……私のよつな姿の人は、近くにいるの」

ヒトを知ってる。

この世界に人がいる。

『ずっと遠くにいるよ。世界の中心、セルの木から、一番遠い光の地』

「世界の中心」

中心と聞いてあの大木を思い出した。

『闇が生まれて、闇が還る場所』

「……私は、ヒトの居るところに行ける?」

『……行きたいの?セルの木の傍は世界で一番安全で、あなたを傷つけるものを寄せ付けたりしない』

試すような田だ。

クロさんのキレイな青の田が細められる。
小さな体なのに、威圧感で背筋が伸びた。
知らず、唾を飲み込む。

「…行きたい。安全でも、クロさんが居てくれても、やつぱり私は元の世界に帰りたい。少しでも情報を得るためにも、行ってみたいよ

よ

クロさんはじつと私を見ている。

なんだか、少し非難されてくるような気がした。

『…わかった。ぼくが連れて行つてあげる』

「え! ? ほんと?」

『嘘は言わないよ。ぼくらは嘘をつかない』

その言葉に安堵して大きなため息をついてしまった。
気が抜けたって言っていいかも。

それくらい安心した。

『でもね、一つお願いがあるんだ』

クロさんの瞳はいたずらっ子のように輝いていた。

一緒に連れて行くこと。

クロさんの出した条件は案外単純なことだった。
や、むしろ嬉しいです！！
だって何もわかんないし、心配だよ。

クロさんは改めてこの世界の説明をしてくれた。
光源の世界。ルスター。

太陽の光に満ちた祝福の世界。
ヒトが存在するのは世界の端。

光を崇め、闇を厭う。

セルの木から生まれた闇が世界を覆う頃、ヒトは人工の光をともす。
暗闇は魔の象徴。

「どうやって行くの？遠くなんだよね？」

『闇に乗つていぐよ』

『ぼくはセルの木から生まれた闇の一部。ぼくの本体はセルの木の中にある』

いや、私は？

クロさんは頷くと、しつぽを振つて歩き出した。
めっさかわいい。

ネコ好きの血が騒ぐわ～。

実家にいるにゃんこは元気かな。

違うことを考えてるうちにクロさんはあつといつ間に離れてしまつ

た。

「まつて~」

まあ、なんとかなるかな~。

身体がばらばらになつたりとかしないよね。
ちょっと心配だけど。

でも、人間の居るところに行けるほうが嬉しい。

なんか、さつきの説明で、闇を厭うとか言つてたよつた氣があるんで
だけど……

クロさんが闇の一部……大丈夫なのかな……

クロさんに聞いてもいいんだけど、なんか怖いからやめておけ。

『ねえ』

「はい？」

思わず敬語。

『ぼくはあなたをなんて呼べばいいの?』

そういえば自分について何にも話していない」とこぼづく。

「あきら。あきらって呼んで」

『うん、ねえ、あきら』

「はい、なあに~?」

『最初に言つておけナビ、君とやつべつ同じなわけじゃないからね
?』

なんだか、意味深な発言に、私は曖昧に頷いた。

「どうこの意味？」

《実際に行つてみないとわかんなによ》

クロさんはすべく楽しそうだ。

「なんで一緒に行つてくれるの？」

クロさんは振り返つて私を見上げた。
大きな青の目が少し細められた。

《面白そだだから。それと、ヒトに興味があつた。

君と会つて、ぼくに自我ができる前から、闇の一部として世界を見
ていたんだ。

他の動物とは違う知性を持つた種族の生活に興味を持つてた。
だから、あの日、君が一人で闇の中に放り出された時から気になつ
てた。

君はヒトとそつくりだから……》

そう言い切つてまた歩き出したクロさんを追う。

そうか、初めてここに来た時から、見ていてくれたのか。
夜の間に感じていた安心感の正体もクロさんだつたんだ。

そつ考えたら、なんだかうれしくなってきた。

「」
はじめて初めて心から笑つた気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1447z/>

アウト！

2011年12月28日22時47分発行